

つながるプロジェクト ～被災地の学びを未来へ～

メンバー：櫻井咲希（養護教諭特別別科）、牛島早蘭（養護教諭特別別科）
森本未彩（養護教諭特別別科）、森高万梨菜（養護教諭特別別科）

担当教員：人間社会研究域 学校教育系 准教授 教職実践研究科担当 鈴木瞬
能登里山里海未来創造センター 特任准教授 高原耕平

プロジェクトの概要

本プロジェクトは、能登半島地震の被災地の現状を次世代に伝え、被災地と全国の子どもたちをつなぐことを目的とした取り組みである。報道の減少により、復興が途上にある現状が社会に見えにくくなっている中で、「現状を伝え続けること」も重要な支援の一つであると考えた。そこで、各自の母校の児童生徒に能登の今を伝え、応援メッセージカードを作成してもらい、それらを被災地に届けて掲示する活動を行った。本活動を通して、被災地と子どもたちの間に心のつながりを生み出すことを目指した。

能登の声を次世代に届け、「忘れない想い」を届ける！

【プロジェクトを立ち上げたきっかけ】

自分の目で被災地を見てみたい。養護教諭になったときも役立つはずのその思いから、能登半島地震の被災地でのボランティア活動に参加した。現地では「報道は減ったが復興はまだ途中である」「忘れられることが怖い」「若い人達には現状を伝えて欲しい」といった声を聞いた。看護師免許を持ち、養護教諭を目指す立場として、短期的な支援では自己満足に終わってしまうのではないかと考えた。そこで、被災地と長期的につながる支援の形を模索した結果、本プロジェクトを立ち上げた。

【取り組んだこと】

1. 被災地訪問

被災地を訪問し、被災当時の状況が残る場所や、「報道が減り、忘れられてしまうことが怖い」という声を聞いた。一方で、出張輪島朝市など、復興に向けた取り組みも進められていた。現地の高校生語り部からは、地震後から現在までの復興の様子や避難所生活における子どもの居場所づくりとしての“たまり場”の取り組みについての話を聞き、「もう一度能登に来てもらえるように」と前向きに発信し続けたいという思いが語られた。

2. 河原田公民館への訪問

小学生が書いたメッセージカードを掲示してもらうため、河原田公民館（輪島市）を訪問し、本プロジェクトの趣旨を伝えた。別科の特徴を生かし、卒業後もグループメンバーそれぞれの出身地の学校で出前講座を行い、全国からメッセージカードを送り続けることを計画している。

3. 富山と和歌山での出前講座

能登の現状や復興の様子を伝え、児童生徒に被災地へのメッセージカードを作成してもらった。メッセージカードという形でアウトプットすることで、能登の現状を自分事として捉えている様子が見られた。また、子どもたちが「支援される側」ではなく「支援する側」として関わる経験に繋がった。参加した子どもたちからは、「今だけでなく、今後の災害も忘れずに生かしていきたい」「同じ地震を経験した富山と能登でも、被害の違いに驚いた」といった声が聞かれた。

【まとめ】

本プロジェクトを通して、被災地支援には、物資や作業だけでなく、「忘れずに関わり続けること」「現状を伝え続けること」も重要であると実感した。現地で聞いた「忘れられることが怖い」という言葉は、私たちにとって支援の在り方を考え直すきっかけとなった。一方で、被災地を応援する“言葉”の難しさも強く感じた。出前講座で子どもたちがメッセージカードを書く際、「頑張れ」「努力は報われる」といった言葉を伝えたい思いがあるが、すでに懸命に生きている人達に向けて、その言葉が本当に適切なのか悩む姿が見られた。私たち自身も、本プロジェクトを通して同様の葛藤に向き合った。能登の現状を知り、語り部の思いや地域の取り組みに触れる中で、復興は今も続いていること、そして多くの人の関わりによって支えられていることを学んだ。今後は、養護教諭として赴任する学校においても本活動で得た学びを生かし、長期的な視点で被災地と関わり続けていきたいと考える。

能登は一人じゃない。これからも。ともに。

